新教育に就て

一

その表現形式において多種多様な現代教育の改革運動も、それの個々特殊の偶然性を括弧に入れて、本質的なもの、一般的なものを掴めば、人はその原理的なものゝ寧ろ餘りに單一であり、且又久しい間教育史上を流れて來た、傳統的のものであるのに氣付くであらう。假令ソクラテスまでとは言はないにせよ、人もし第十八世紀まで溯つてその世紀を代表するルソー・ペスタロッチーさてはフレーベルなどの教育思想を觀るならば、恐らくは現代の人達が新教育の名に於て呼ぶその新教育が、現代のそれよりより徹底した形において、說かれてゐるに驚くであらう。私は新教育の正體を探れば探る程、それが第十八世紀を代表する新教育思想以外の何物でもないといふことに氣付く。蓋し新教育の基礎概念は、結局教育教授の道程において、認識主觀を純粹自全の境に置かうとするものであるが、併しそれこそルソーが豫言し、ペスタロッチーが身を以て當り、さうしてフレーベルが後期カント派の形而上學的觀念論、詳しく言へばフィヒテの自我の哲學、ヘーゲルの歷史哲學乃至シェリングの同一哲學に依てその據つて立つ足場を工夫しようとしたもの以外の何物でもあるまい。

世には新教育の聲を聞いて怖れをなすものもある。併し怖れるを罷めよ、さうして靜かに第十八世紀の教育史を繰つて見るがいゝ。けれども新教育に怖れをなすものは恐らくルソーにおいてまた怖れをなすであらう。ルソーが怖ろしいなら去つてペスタロッチーに若しくはフレーベルに聞くがいゝ。何故なればルソーの說くところも、ペスタロッチーの說くところも、フレーベルの說くところも、新教育の概念としては多くの人々が今日想像のみ徒らに逞うしてゐることほど左樣に相違するものではあり得ないから。教育を生活として考へることは恐らく新教育の第一原理であるであらう。教育を生活として考へるとは教育において兒童を解放するの謂であり、從てそれは兒童を中心とする教育思想ともなつて來る。さうしてこの考を人は多く二十世紀の所產と早呑込みをするのであるが、それこそルターの宗教改革にも比すべきルソーの教育改革の眼目であつた。その生涯を言はば夢に送つたルソーは教育を生活とし、教育において兒童を解放する旨を一卷のエミールに認めて、カントやペスタロッチーや其他多くの時人の胸を打つたに過ぎなかつたが、ペスタロッチーの出づるに及んで、ルソーの夢は實地に證明された。教育改革家としてのペスタ

ロッチーが八十餘年の努力は『生活が陶冶する。』といふあの一語に盡きる。『生活が陶冶する』とすれば、教育は偏に生活として企圖されるべく、教育を生活として企圖することは軈て教育において兒童を解放することである。ペスタロッチーが直觀又は勞作の原理は認識構成の過程において兒童の全我を解放し、偏に認識主觀の純粹自全を目論むものである。教育即生活と言へば新らしい。けれどもそれはペスタロッチーの『生活が陶冶する』である。プロジェクトメソドと言へば新らしい。けれどもそれはペスタロッチーがスタンツやブルグドルフでやつた直觀又は勞作の教育である。惟ふに現代教育における教科組織は要素としての既成の專門諸學を上から下に運んで、組立てられた原子論的集積以外の何物でもない。意識の構造の具體的全體性を思へば、原子論的集積としての機械的なこの現代の教科組織は打ち破らなくてはならない。たゞその破る途は全教科組織を認識上目的の王國にするといふこと、言換れば凡ての教科をば一個の具體的な未分化的現實性が彼、凡てを編み込んでゐる關聯乃至作用交換の中に安住させるといふことである。現代教育における改革運動はそれの種々相にも拘はらず、凡て兒童自らの生活地盤に歸り行くことに依て、此意味における教科の再建を目論むものと言つて差支はない。さうしてそれがさも新なるが如くに見えて、其の實十八世紀以來の傳統であると私は言ふであらう。

二

事柄は狹く教科の組織だけには留まらない。現代は理論的實踐的の兩義における認識の考察から、學校はその言葉の嚴密な意味において社會でなくてはならぬといふ雄叫に喧ましい。凡ての認識が若し『社會的財產』であるならば、學習は社會原理の上にのみ可能である。そこで學習の場所としての學校の社會性が今や興味ある一個の問題となつた。私に依れば人類の學習の場所としての現代の學校はまだ社會としての條件を具へてゐない。それは廣義において社會と呼ばれても、認識的收益を目的とする個人の群れ集まつた矢張り原子論的の集積であつて、原理的にはせいぐ〜十八世紀風の個人主義的乃至は契約的利益社會の一變形に過ぎない。現代の學校組織は要素としての個人の機械的集積たる意味において、要素としての既成の專門諸學の機械的集積としての現代の教科組織と少しも選ぶところがない。斯く考へて學校組織の改良ではなくて、『建て直し』といふことが、今や叫ばれなくてはならない。『建て直し』とは既にあるものを承諾することの上に成り立つ所謂改良ではなくて、原理そのものゝ變換を意味する。

現代學校組織の『建て直し』とは、認識的收益の目的の爲の手段としての學校を、矢張り目的の王國にする事でなくてはならない。目的の王國としての學校とは、兒童の全我が解放されて、其

處で純粹自全の生活の營まれる、社會としての學校の謂である。このやうな學校の可能が就中教師と兒童との間の、並に兒童と兒童との間の內面的人格原理を前提するは言ふ迄もない。マックス、シェーラーの口吻を學んで、それを『東洋的なもの』と言つても、大した間違はないかも知れない。さうして、このやうな主張を、人は戰後の獨逸に萠ざして來たあの『協同社會學校』において見るであらう。けれども『協同社會學校』は勞作學校と共に本質的にはペタスロッチーがその全生涯を以て築いたところのものなのである。例へば彼がスタンツの教育法を見てもそこには認識と勞作とが渾然として融合されてゐるだけではなく、敬愛信といふ人格原理が基調をなして認識と勞作との渾一的過程が十分社會化されてゐた。ペスタロッチーの學園は曾て認識的收益を目的とする利益社會ではなく、敬愛信の人格原理に基づく眞の協同社會であつたのである。

斯く考へて新教育と言つても、それは詮ずるところ、舊き酒を新しき革囊に盛つたものである。眞理もその粉裝において樣々であらう。教育の眞理は、併し、近世以來曾て迷つた例はない。迷ふは人の心であつて、眞理ではないのである。

勞作教育の本質

一

獨逸最近の教育運動中最も顯著なものゝ一つは勞作教育である。勞作讃美の聲は、併し、狹く獨逸だけではなくて、廣く世界教育の廣野に響き渡つて、教育の歷史に一つの新らしい紀元をさへ劃す概を示してゐる。凡て讃美の聲は純でもあれば力强くもある。人は物事を讃美するほどの情熱が無くてはその物事を實現することが出來ない。この意味において今日我々が耳にする勞作讃美の聲は尊い。けれども凡そ讃美の病とするところは、動もすれば對象を偶像化して、一種の浪漫的感傷主義に陷るところにある。私は勿論浪漫的感傷主義に怖れを爲すほど臆病な淸教徒ではない。否な、否な、私は教育者の心の奥に浪漫的感傷主義がなくては、教育活動の發展もよしなしと見るほど左樣に浪漫的感傷主義に深い理解と同情とを寄せてゐる。それにも拘はらず私は他面この浪漫的感傷主義が讃美の爲の讃美に陷り、對象を偶像化するのを怖れる。斯く考へて現代流行の勞作教育をして眞に實を結ばせる工夫は暫らく徒らなる讃美の聲を鎭めて、靜かに勞作そのもの

の本質契機の概念的反省を試みるにある。勞作の本質契機とは何か。

私の見るところでは勞作若しくは勤勞の本質契機は我々の意識の一種獨異な內面的緊張狀態である。我々の意識がそれの一部でなはく、情意を主人公として全體的に一定の對象に向つて働らきかけ、その働らきかけた全體的意識の內面的緊張が持續し發展して、一定の目標—それを結果と言つても差支はない——に達するその意識の積極的流動狀態の外に勞作若しくは勤勞の本質はない。併し人はこのやうな意識の內面的緊張を何處にまた如何にして構成することが出來るであらうか。その工夫が嚮て勞作教育である。私に依れば上に述べたる如き意識の內面的緊張は兒童の全生活を通じて目論見得るところであり、また目論まるべきところである。「すべての道は羅馬に通ず。」とは西洋の古語であるが、兒童の學習生活一つとして勞作教育に通ぜざるはない。勞作教育が特殊の一教科の私すべきものでなく、すべてに通ずる普遍の大道であることは、勞作が上に示した如き意識の內面的緊張以外の何物でもないところから明かである。

惟ふに各科の學習が成立する基礎條件は兒童の意識が生命主觀としての情意を主人公として全體的に一定の對象に働らきかけ、その働らきかけた全體的意識の內面的緊張が持續發展して一定の目標に達する積極的流動性である。例を一個の數學問題に取つても、それは決して普通考へられる如き單なる論理的な推理作用に依ては解かれない。問題に働らきかけるには意志の積極的發動を必要とし、如何なる道を辿るべきかを洞察するには直觀やファンタジーの働きをさへ必要とする。直觀やファンタジイは、併し、單なる知識の作用ではなくて內に感情を含んでゐる。一々の運算は一見機械的の知識作用の如くであつて、實は感情の承認を必要とする。「一に二たして三」の理解も、感情の承認なくては全一なるを得ない。理解は一般に感情の承認を待つて完了する。幾何學にあつて並行線が無限の遠方において相交はるといふが如き認識は尋常論理の專柄ではなくて、感情直覺を必要とする。圓に內接する多角形はその角を如何に增しても、それは永遠に多角形でもあるであらう。それが圓として認識されるには必然的に認識の「飛躍」を必要とするが、一般にこの飛躍は尋常の論理の境を超えた一種藝術的の直覺である。斯く考へて數理の認識も亦狹く論理のことゝ解すべきではなくて、知識も感情も意志も渾一的に關聯し、未分化的全體として具體的に作用する。數理の認識も人格の全體性でなくてはならない。一念三千は意識の普遍的特色である。是においてか算術の學習も兒童に取つては全我の具體的渾一的活動であり、從つて其處には勤勞勞作の原理も內在する。勞作の原理が特殊の筋肉運動にのみ依屬すると考へるが如きは勞作の本質が要するに意識の全體的內面的緊張であるといふ理を解せざるに基づく。

二

勞作はすべての學習に共通する普遍の原理であつて、學習が成り立つ爲に勞作は缺くことが出來ない。すべての學習は勞作である。勞作なき學習は實は學習たるを得ない。そこで私は「學習即勞作」と言ふ。既に學習即勞作とすれば、勞作教育はあらゆる學習に内在的に發展する。斯く考へて私は勞作教育の實は兒童のすべての學習、すべての生活に内在的に收めらるべきであると言ふであらう。世には勞作教育を以て特に筋肉運動を必然的條件とするかの如く考へるものもなくはない。それは却て特殊の勞作教育である。筋肉を媒とするや否やは勞作一般に何のかゝはりもない。たゞ筋肉を媒とする勞作が特別にも效果的であるといふ教育の材料は否むべきでない。わけても兒童生活の或る時期には他の時期に比して、筋肉を媒として勞作させるを、一層有効とする場合はあらう。それにも拘はらず、勞作の本質は依然として筋肉にあるのではなく、筋肉を媒として構成される意識の内面狀態にある。筋肉運動が若し勞作の本質であるなら、動物の生活はすべて勞作である。併し動物の生活は自然必然的の機構であつて決して勞作ではない。勞作の本質は斯くして意識の内面狀態であるとの論に還つて行く。

斯く考へて勞作若しくは勤勞の精神の教養はすべての學習のひとしく負ふべき義務であり、またひとしく負ひ得る義務である。さうしてすべての學習はこの自ら負ふ義務を果すことに依て、實は同時に自己の目的を果して學習過程を完了する。唯だ一個の意識の内面的發展が學習であつて同時に勞作なのである。

たゞこのやうな意識の内面的發展を可能ならしめる條件は、意識の眞實性を喚起する教育の一般的秘訣に依るの外なく、意識の眞實性を喚起する教育の一般的秘訣は偏へに宗教的敬虔に俟つ。此の意味において宗教的敬虔は學習と勞作との由て生ずる本源である。フレーベルが人間教育のことを考へて、勞作と宗教、宗教と勞作との融合渾化にありとしたのは、意味深長と言はなくてはならない。私が現代の勞作教育論に對する不滿は就中勞作の本質に就いての精密な探究の不足と勞作の人格的内面的基礎——假令それを聖なるものと言はないにせよ——その人格的内面的基礎を明かにすることを粗略にすることである。

リツト教授のこと

一

私が初めてリツト教授に會つたのは、此の前西洋に來た一千九百二十二年の一月のことで、彼が伯林大學へ轉じたシュプランガーの後を襲つて、ボンの大學から來てまだ間もない頃であつた。小西先生と連れだつて大學の方へ訪ねて行つた私達を、先づ教育學の研究室へ案内してくれた時の教授の印象は、今も私の眼前に髣髴する。鼠の背廣に包んだ背の高い太つた體軀、どう見てもまだ四十は越えないほどの若々しさ、書生肌とさへ言ひたいやうな、端的な、快活な、親しみ易い物言ひ、その物言ひで廣い研究室をあちこち引つ張り廻しながら、書物や雜誌を指さしたり、引き出したりして、學界の樣子などを話してくれた。物言ひの端的で親しみ易いにも似ず、書いたもの堅く讀み悪くいといふことを、私は「歴史と生活」や「組織的哲學」に寄せた「教育學」を讀んで知つた。堅く讀み悪くくはあるが、何かしら多望な將來の豫約されてゐるかの如く私には思はれた。さうして「その多望な將來」が私を引きつけて、とうく今度の外遊期間をあげてライプチヒに在留させるやうにもなつたのである。

健筆のリツト教授は主著「個人と社會」の外に、「歴史と生活」、「認識と生活」、「教育學の可能と限界」、「現代の哲學とそれが陶冶理想への影響」、「新時代の倫理學」、「指導か放任か」、「科學・陶冶・世界觀」など數多くの著作を公けにした。「カント研究」に寄せた「教育學的思惟の方法」は一篇の論文ではあるが、リツト教授の教育學を知るにいゝ著作である。斯く數多い著作の中で眞にリツト教授の力倆を示すものは「個人と社會」である。初版を出して間もないうちに二回に亘つて、可なりに根本的な改訂を企圖したことからもその消息は窺はれる。今度初めて私が教授を私宅に訪れた時なども、初版は讀むな、また同じ改訂版でも一千九百二十五年の、即ち最後の版を見るやうにと、念さへ押した。成るほど初版と第一第二の改訂版を通じて、人は教授の立場が生命哲學から現象學へ、現象學から辨證法へと進んだその道行を、ありありと跡づけ得るのである。哲學者及び教育學者としてのリツト教授の何であるかの問に對して恐らく誰も多少の躊躇をするであらう。何故なれば僅か十三四年の間に彼ほど立場のあはたゞしい進展を見せたものも少いから。リツトをシュプランガーと並べて生命哲學者若しくは精神科學的哲學者とするものは日本に少くない。けれどもそれは單なる常識論か、さなくば過去のリツトであつて、今日のリツトはこれを生命哲學者

若しくは精神科學的哲學者と言ふには餘りにその學風が變つてゐる。學徒としての出立點のリットは正しく生命哲學者であつたであらう。けれども其の時既にディルタイの流を汲んだシュプランガーとは異つて、彼はジンメルの「生命哲學を承け繼いでゐる。同じ生命哲學に棹しながらディルタイかジンメルかのこの相違が、今にシュプランガーとリットとをそれぞれに特色づけてゐるのを人は見遁がしてはならない。

「シュプランガーとリット」と、人は此二人が恰も双兒ででもあるかのやうに並べて言ふ。併し、多少の精細な觀察は私達をして此二人の思想家の間に可なり顯著な對比のあるを氣付かせる。「可なり顯著な對比」とはシュプランガーに見る具體的な內容的な思惟とリットに見る論理的な組織的な思惟との對比である。私と交はした會話の中でリット自身「シュプランガーをシュライエルマッヘルとすれば、余はヘーゲルである。」と言つたなどは、兩者の學風を表はして餘りある。實際シュプランガーがすべてを具體的に內容的に考へ、且つそれを時には心情に滿ちた端的さを以て表現するところはシュライエルマッヘルそのまゝである。ウイルヘルム、フォン、フンボルトの研究に彼が得意の業績を示したなども決して偶然ではない。これに反してリットが物の考へ方は著しく論理的であり、組織的でありその表現の體裁も十分形式を重んずる。かるが故にリットの著作は獨逸でも難解を以て聞え、相當學問ある者もリットは讀めないと告白してゐる。恐らくそれは僞らざる告白であらう。だからリットには多くの著作はあるが、讀まれてゐない。リットをシュプランガーと並べて今に單なる生命哲學者として取扱ふことなどが、既にリットの讀まれてゐない十分の證據であつて、人若し眞にリットを讀まば、リットの位置付けは必然に一層の特殊性を帶びなくてはならない。その思惟の仕方における論理的組織的はリットをして單なる生命哲學から、從て又シュプランガーから袂を分かたせた。何故なれば生命哲學に見るあの非合理的な學問方法はリットの學的良心を滿足させ得なかつたから。リットに言はせると、學問の對象は如何に非合理的であつても、その對象を處理した結果としての學理が妥當な爲には、對象を處理する方法は十分合理的でなくてはならない。　對象の非合理性と方法の合理性とは哲學的思惟において混同すべからざる要點であるにも拘はらず、ディルタイ一派の生命哲學は奇怪にも此等兩者を混同してゐる。この混同こそ生命哲學の弱味であると看取したリットは、生命哲學の爲に涙を飲んで暫らく生命哲學と袂を分かち、他に別に學問方法を探究することに依て、生命哲學を哲學の名に價する哲學に育くまうとした。その必然の結果は彼を導いて現象學へと趣かせたのである。リットがシュプランガーと隔つたゞけそれだけシェーラーに近寄つたなども無意味のことではないであらう。併しリット

は現象學にもそのまゝ安住することが出來なかつた。蓋しリットの想望するところは生命哲學に論理的方法的基礎を與へることの外、別にまた生命哲學が自ら企圖して、而かも竟に成し遂げ得べくもない、心理主義と論理主義との綜合統一にある。この綜合統一を現象學に期待したリットは勢、現象學を辨證法的に發展せざるを得なかつた。さうしてその必然の道行は再びリットを導いて辨證法そのものに深入させ、今や彼を純然たる辨證法的哲學者たらしめた。「あなたは生命哲學者ですか、現象學者ですか、それとも辨證法學者ですか。」といふ私の露骨な問に答へてリット自身もいさゝかの躊躇なく「私は今、一人の辨證法的哲學者(ディアレクティッシェルフィロゾーフ)である。」と言つた。この辨證法的哲學者としてのリットは忽ち「辨證法の理論」の著者としてのヨーナス、コーンや「現代の哲學における辨證法」の著者としてのジーグフリード、マルクや「辨證法の精神と世界」の著者としてのリーベルトと相識つただけではなくて、一層根本的に辨證法の開山としてのヘーゲル研究に沒頭した。リットの近業を讀んで誰しも感ずるものは、そこに響けるヘーゲル復興の雄叫であらう。リットにおけるヘーゲル復興は軈て客觀精神の復興であり、それに依て彼れの目論む目論見は生命哲學並びに生命教育學の陷いる表現主義の克服にある。

辨證法的教育學者としてのリットを解する上に直接意味ある著作として、私は「現代の哲學とそれの陶冶理想への影響」並びに「指導か放任か」を擧げる。前者において彼れの述べるところは、一現代教育思潮の特色は各自その據つて立つところを異にする立場の鋭い對立に滿ち々々てゐること、二その諸對立の間にあつて心理主義と論理主義との對立こそは最も顯著な且又中心的の對立であること、三この中心的對立を克服するのことに當つたものは就中先づ生命哲學であること、四然るにこの生命哲學はそれの根本原理としてのあの生命の特質ゆゑに、理念に對する親善は生命に對するそれに及ばざること遠く、その必然の結果は心理主義に傾いて、心理主義と論理主義との對立の克服乃至綜合統一の課題の到底解き難きこと、五こゝにおいてか生命哲學の後を承けて心理主義と論理主義との對立を克服し、綜合統一の課題を解き得るものは「ブレンターノの心理學をボルツァーノの論理學に依て發展する」とも形容され得るやうな現象學でなくてはならないこと、六併し此の意味の現象學は就中辨證法的なところに中心をおくものでなくてはならぬことである。この主張を提げて教育教授の立場を十分辨證法的に基礎付けようとしたのが、前にも揭げた「指導か放任か」である。主著「個人と社會」はシュプランガーの「生活形式」にも比すべき彼が文化哲學であつて、同時に彼自らも言ふ如く、彼が教育學の基礎論であるが、その表題を殊更ら「個人と社會」としたところからも、人は容易に彼れの立場の辨證法的なのに氣付くであら

う。實際此の書は現象學と辨證法とに基づくリットの文化哲學である。斯く觀て彼が自ら言ふ「余は今一人の辨證法的哲學者である」は事實である。併し生命哲學に出立した彼れの足場が今や辨證法に置かれるに至つたのは、そも〳〵偶然か必然か。私は答へて、それは彼れが思想の內的論理の必然であると言ふであらう。何故なれば既に前にも指摘した如く、リットが先蹤はひとしく生命哲學者でもディルタイではなくて、ジンメルその人であるが、さてそのジンメルは人のよく知るやうに、假令自ら定式化こそせざれ、その思想の內部に言はゞ素質(アンザツツ)として多分の辨證法的契機を祕めてゐた。依つてリットの今日あるは彼がジンメルの門に入つた、實にその時既に豫約されてゐたプログラムの必然の開展であると言つて差支はあるまい。誠に一時代を率ゐるほどの眞實の思想家の思想にして、單なる機械的偶然的の經路を辿つたものとてはなく、すべてある一點から內的論理の必然に從つて連續發展したものである。

二

然らば教育學者としてのリット教授の業績如何。併し斯る問は齡五十にも達せぬ青年學徒に發する問としては妥當を缺く。それにも拘はらず、既に彼は相當の業績を擧げて、教育學の世界に一地歩を築いてゐるではなからうか。蓋し「組織的哲學」に寄せた「教育學」は言はゞ教育學の概論として、軈て彼が大成するであらうところのものの輪廓を大體察知するに十分である。それにも增してカント研究に寄せた長篇「教育學的思惟の方法」は教育學徒としての彼れの才能を可なり明瞭に示すよき論文である。さうして人は其處に彼が教育學體系の基礎をなすであらうところの方法論を確かに窺知することが出來る。「教育學の可能と限界」は恰もシュプランガーの「文化と教育」とにも比すべきもので、その表題の學問的であるにも似ず、副表題も示すやうに「教育及び教育理論の現狀への論文集」であるが、併し前にも述べた「現代の哲學とそれの陶冶理想への影響」は彼が教育學的立場を明かにするに十分適當な著作であり、また彼の「指導か放任か」は人がその表題から直接想像するでもあらうやうな常俗的の著作ではなくて、學問的に價値ある良き著作である。「歷史と生活」にせよ、「科學・陶冶・世界觀」にせよ、教育學徒としてのリットの俤をしのぶに決して無意味ではないのである。而かも主著「個人と社會」が彼自らの言ふやうに、彼が教育學の文化哲學的基礎なるを思へば、人は教育學徒としてのリットの業績を相當高く見積るべきではないであらうか。それに較べると教育學徒としてのシュプランガーが業績は今尙少いかとも思はれる。リットの「現代の哲學とそれの陶冶理想への影響」を讀めば、誰しも氣付くであらうやうに、リットはアロイス、フィッシャーやオットー、シャイブナーなどの學說にまで言及しながら、シュプランガーの

學說には全く關說しない。それに不審を懷いた私が、或日リットを訪ねてその故を問へば、リットは即座に答へるのであつた。『シュプランガーの主著「生活形式」は彼が文化哲學ではあつてもそれは直ちに彼が教育學の基礎論とは言ふを得ない。「ウィルヘルム、フォン、フンボルトと人文理念」はそれの名著たることに何の疑なしとはするも、それは一個の歴史的研究であつて、教育學徒としてのシュプランガーを語るに良き著作とは言ふことが出來ない。「文化と教育」にせよ、「教師養成に關する思想」にせよ、人はこれを以て教育學徒としてのシュプランガーの位置をトする著作とは決して言ふことが出來ない。』

けれど待て。シュプランガーにせよ、リットにせよ、共に西洋の學者としては寧ろ餘りに若き青年學徒である。西洋において時代を導くほどの學徒は多くは齡六十を越えた老教授である。それに較べると五十にもならないシュプランガーとリットとは異數の若き學徒である。私達は寧ろ此等の若き學徒の多望な將來に期待にかくべきではないか。さうしてシュプランガーには人をしてシュライエルマッヘルを想起せしめるやうな具體的な內容的なものを、リットには人をしてヘーゲルを想起せしめるやうな、組織的な論理的なものを。雜食は保健の秘訣であるといふ。私達は學問的にも種々なるヴィタミンを攝取すべきではなからうか。現代の教育者がシュプランガーとリットとを同時に有つ意味と價値とを私は思はずには居られない。

マックス、シェーラーの訃

一

フランクフルトからの便りによると、シェーラー教授はこの數日前突然長逝したといふことである。大學の講義目錄を見ると、「學說と認識」「政治と道德」といふ講義の外に、教授が指導する演習は「哲學的人間學の諸問題」「知識の社會學」としてある。「哲學的人間學の諸問題」は哲學の演習であり、「知識の社會學」は社會學の演習であつて、何れも教授が得意とする獨自の立脚地に關するものであるといふことは、察するに難くない。而かも教授は此等の表題を徒らに掲げただけで、一回の講義一回の指導もせずに逝つたらしい。逝いた人も逝かれた人も無念でなくてはならない。多くの新聞はこの偉大な哲學者の死を惜んで、何れも數千言の讃辭を彼に呈してゐる。例へば「ライプチヒ最新日報」といふやうな地方新聞さへも、「死はマックス、シェーラーといふ現代の最も生命ある、最も多方面的な獨逸の哲學者をば突如として奪ひ去つた。豐かな果實多かるべき作業の眞最中に、然り、哲學に關心する全世界の人達がわけても期待に滿ちて彼を眺めてゐた際に」といふ口吻を以て、實に約三分の一頁を彼が死に割いてゐる。私は、併し、ミュラー、フライエンフェルスが寄せてゐる、五月二十二日の「伯林日々新聞」の記事を通して、此の哲學者の訃音を祖國の方へも傳へたい。簡にして要を得たフライエンフェルスの筆は、たゞシェーラーが死を悼むだけではなくて、ありし日の此の哲人の面影を偲ぶに最も相應はしいものの一つであるから。さうして凡そ新聞といふやうな、一般の民衆を相手とする刊行物が、一人の哲學者の死を悼んで、斯の度の專門的な內容的な記事を掲げるといふことが、若し我が祖國の人達に、獨逸國民が有つ文化と教養の深さを解する多少のよすがともならば、それはまた私に取つて望外の喜であるといふことをも私はこゝに附記したい。

二

心臟の疾患で逝いたマックス、シェーラーを以て、獨逸精神生活はその最も優れた一人の代表者を喪つた。高き階級の一人の學者といふだけではなく、生命あり且又生命を目醒ます力ある一個の人格は彼と共に消滅した。彼が死は彼に接近せる者には思ひがけなくやつて來た。彼が年來重い心臟病に罹つてゐたといふこと、彼が僅かに人工的な方法でその身體を精神に從はせてゐたといふことは、人のよく知るところである。ケルンにおける彼が從來の教授の椅子を、フランクフ

ルトのそれと取り替へるやうになつたことは、併し、彼がなほも新たなるさうして廣々とした眺を眺めようとする希望を彼に與へた。此の希望は然るに今や畫餅に歸してしまつたのである。

シェーラーが生涯は他の獨逸の學者の場合が何時もさうであるやうに、決して直線的には經過してゐない。彼は深い精神的の苦闘に惱み、その上外部的の苦闘をも避けない人格であつた。彼が著作における數々の矛盾は、苦闘多き彼が本性からのみ解さるべきである。けれども彼れの著作が特殊の價値を附してゐる現代の諸問題に對する情熱ある生の接觸は、實にその同じ源泉に由來する。倫理や宗教の問題に就いて哲學するとき、彼は他人の生活を觀察するといふやうな冷かな一觀察者として哲學しはしない。自己の問題を自ら生活し貫き自ら惱み貫きたればこそ彼は哲學するのである。

一千八百七十四年八月二十二日、シェーラーはミュンヘンに產聲を擧げた。彼れの言葉は後年再び此の地に歸來するまで、決してバイエルン調を失はなかつた。ミュンヘン・伯林・ハイデルベルヒ及び彼がオイケンから學位を得たイェナにおいて彼は學んだ。このイェナにおいて彼は一千九百二年教職を得、一千九百七年にはミュンヘンの大學に轉じた。然るに彼は一身上の問題に絡まる經緯(いきさつ)から一千九百十年には講師の職を退いた。今や自由作家としての彼は主として伯林に生活し、戰時中は外交上の命を帶びて和蘭で活動した。平和締結後ケルン大學の設立を見るに及んで、彼は哲學及び社會學の教授の位置を得且つ社會科學研究所長になつた。ケルンを中心に或は教師として、或は建言者として、彼は遠くその活動を四方に展開し、また屢々講演者として伯林にもその姿を表はした。今年初春彼が死の直前、フランクフルトから彼は招かれた。

シェーラーの思想は強い幾轉回を經驗してゐる。彼は若き日に一つの組織をしかと作つて、それを系統立てたり改良したりするのに、その生涯を通して不變に從事するといふやうな哲學者には屬してゐない。人としての彼がさうであつたやうに、流轉と發展との力があり且つ種々なる感激にその胸を開いてゐた彼は、その哲學においても種々なる場面を疾走し、ともすれば曾て信じたものをさへ燒き盡さずにはおかないやうな慨を示したこともないではない。彼はカント學徒として身を起してゐるにも拘はらず、彼自身がカントの立場を越えてゐるといふこと乃至はフッサールがあの「論理學的研究」において歩める途が彼れの途でもあるといふことが、フッサールと相識るに及んで彼に明かになつた頃、彼は既にカント的意味において書かれた論理學上の一著作を公けにしてゐた。久しく彼は「現象學」に屬してゐた。さうしてフッサールの「年報」の中には最も重要な彼れの一二の著作が載つてゐる。そのうち「倫理學における形式主義と實質的價値倫理學

一千九百十三年及び一千九百十六年)」の如きは力作と言つていゝ。此の期の作に屬するものに、「不滿と道德的價値判斷一千九百十二年」及び「現象學と同情論一千九百十三年」などがある。小論文は集めて、「價値の顚倒に就て一千九百十九年」二卷をなしてゐる。

スコラ哲學の爭ふべからざる根本原理が蘇生してゐるやうなあの現象學を通して、シェーラーは加特力教主義に接近し、さうしてそのアウグスティンに關する研究からは、多くの宗教哲學的な內容の著作が現はれて來た。「人間における永劫なるものに就いて第一卷一千九百二十一年」はその尤なるものである。

此等の著作のすべてにおいて、彼は新カント的認識論の斷乎たる拒否の下に、人間精神はその「直觀的意識 das schauende Bewusstsein」の力を以て實在の本質と本質關聯との明瞭な認識に突き入ることが出來るといふ理を說いてゐる。多くのカント學徒の主觀主義に對立して、シェーラーは價値論に達するところの一個の客觀主義を說いてゐる。倫理的及び宗教的の價値も彼には心意的主觀の存在從て欲望や感情に依存せざる客觀的事實である。「本質直觀 Wesenschau」において攫まれる此等の價値は一つの確かな王國を形成する。自己の教說を以て、シェーラーはあらゆる近代の心理主義と自然主義とに對立する。

晩年のシェーラーは、併し、一轉回をなして著しくフッサールから遠ざかつた。惟ふに彼は世人が普通認めてゐるほど此の思想家に依存するものではない。ニーチェとベルグソンとの激勵も彼には强く働いてゐた。而かも晩年における社會學上の活動は經驗的の研究に彼を導いた。さうして「知識の形式と社會一千九百二十六年」といふ著作において、彼は著しく經驗的研究に接近し、遂に人類の理性形式の絕對的歷史的常恒性の原理を放棄した。とは言へ、此の知識社會學 Wissenssoziologie は一面においては哲學的人間學の、他面においては一大形而上學の新研究に對する單なる準備でなくてはならない。たゞ此の企圖が如何なる程度に成熟したかは簡單に語ることが出來ない。

シェーラーが精神生活のやうに、變化に富み、關係複雜な精神生活を短き考察において明かにするは殆ど難い。若し夫れ「戰爭の天才一千九百十六年」と題するあの名著の如き餘業に就いては、たゞそのことを陳べるだけにする。シェーラーが著作は樂しき印象には富んではゐるが、併し、決して輕い讀物とは言ふを得ない。彼れの作品には言はゞ建築家にでも見るやうな强固な趣はない。けれども彼は曾てその表現を叙情詩的のものとしてその特色を表はした。勿論それは多種多樣の彼れの知識を到るところに閃かし、その教說に幾千の關係を響かせようとする彼れの仕方な

のだ。屢々彼れの人格の道連れとなつて展開して來るあの論議の情熱は、彼れの著作においても亦彼を誘惑して岐路に導いて行く。それにも拘はらず、若しくは正しくそれゆゑに、彼は現代の最も影響多き哲學者になつた。世人は恐らく彼れの著作において如何なる他の獨逸思想においてよりもより速き脈搏を感じ、より生動せる問題との接觸を感ずるであらう。世人が彼れの教說を科學の永續的財産として維持し得るかどうかは兎も角として、彼は到るところにおいて獨逸精神生活の一人の最も强き建言者であり主動者であつた。彼はその獨自的なる、遂に逆說に陷るところまで突進し、その流轉的なる、遂に自己撞着に陷るとこまで突進せずには居られぬやうな思想家であつた。彼はまた世の多くの人達のやうに、たゞ正しきを守らうとした人ではなくて、寧ろ眞理を求め求めて、それゆゑに、今迄懷く自己の思想を顧みないだけではなく、進んでそれを放棄するのも意とせぬやうな人である。さうして彼れの反對者には屢々矛盾と見える此內的生動性こそ、我等をして此の思想家を他の誰れにも增して崇めさせる所以のものと思はれる。(一千九百二十八年五月三十日萊府インゼル町の假寓にて)

ライン教授逝く

一

獨逸教育學の『長老』と呼ばれてゐたウイルヘルム、ライン教授は此の週の水曜日即ち一千九百二十九年二月二十日に、イェナにおいて長逝した。病名は心臟痲痺と言はれてゐる。比較的突然の死らしい。けれども既に八十二歳の高齡と聞けば、攝氏氷點下二十五度から三十度の間を上下するやうな稀な寒氣は老教授が死の一近因であつたかとも思はれる。併し教授の訃音に接した我が祖國の多くの教育者は恐らく『一種意外の感』に打たれるであらう。『一種意外の感』とは『死せるものゝ死』の意味である。その人を迎へることにおいて性急な日本人は、その人を送ることにおいても亦他の何れの國にもその例を見ざることほど左樣に性急である。取るにも早く、捨てるにも早きは我等が民族の有つ一つの持ち前と言つてもいいであらう。そも〳〵このライン教授が我が國に初めて迎へられたのは、今から三四十年も昔のことである。學徒としてのライン教授の生涯が不斷の精進と新生とを續けて居たにも拘はらず、その性急ゆゑに忽ち倦怠を催す我が國の教

育者は再びライン教授を顧みようともしなかつた。斯くして教授は我が國においては既に久しく過去帳の人となつてゐたけれど、その教授が學徒としての生涯の存在の理由と言つていいやうな勞作は、例へば後にも述べる三卷の『組織的叙述における教育學』であり、而かもこの勞作は我等が既に過去帳に入れた以後の教授の研究である。處女の純潔さを愛することはよく辨へてゐても、眞に爛熟せる濃かな人情美を味得する術を心得ないかのやうなのが我が日本人ではないであらうか。私は「死せるものゝ死」を耳にして、意外の感に打たれるやうな、實にさういふやうな祖國の教育者に殊更らライン教授のこの訃音を傳へたい。

二

ウイルヘルム、ライン教授は一千八百四十七年八月十日アイゼナハに生れた。アイゼナハは萊府から汽車三時間で行ける小さな田舍町で、此の町にあるワルトブルグは獨逸で最も古く且つ美しい城の一つとして名のあるだけではなくて、人も知るやうに禁錮の身のルターがその古城の中で聖書を飜譯したことのゆゑに世界的に知られてゐる。ライン教授が生誕の地はかういふ由緒あるアイゼナハであつたのであるが、彼は後にも述べるやうに、このアイゼナハの師範學校長を十年の長きに渡つて勤めてゐる。ラインの父は文科中學校の教師であつた。ラインは獨逸大學の名に價するイェナ・ハイデルベルヒさては萊府などの諸大學に於て、先づ神學を、次いで言語學及び教育學を修めた。バルメンにおける短かき教育實際家としての活動の後、ゲーテの由緒として人のよく知るワイマールの師範學校に教頭を勤め、其後鄉里アイゼナハに歸つて十年の長きを師範學校長として働いた。曾てはフィヒテを通じて近くは又オイケンを通じて、我等に親しみあるイェナの大學にラインが赴任したのは一千八百八十六年のことである。其後の長い生涯を彼はイェナ大學の教育學の教授として、且つは彼自らの案に基づく創設の教育學研究室の長として活動した。彼が獨逸における最初の獨立せる教育學の教授の椅子を占めたといふことも私はこゝに記したい。イェナ赴任の一千八百八十六年から大學引退の一千九百二十三年までの、實に三十有七年間こそは學徒としての彼が生涯の言はゞ黄金時代であつた。その間彼は獨逸教育の理論と實際とを指揮したゞけではなくて、世界的知名の教育學徒として、イェナの町は一時世界教育學のアレキサンドリアの觀を呈し、苟くも獨逸に來つて學ぶ世界の教育學者にしてライン教授をイェナに訪れぬものはないと言つてもいゝやうな盛觀を呈したのである。劍橋や牛津などの外國大學が六十回七十回及び八十回の彼れが生誕日を如何に敬愛の心に滿ちて祝したかを知るものは、ラインの世界的偉大に就いて疑ふことはないであらう。ライン教授がヘルバルト學派の最も優れた唯一人

の殿將として、四面に敵を受けながら、而かもヘルバルト學派の根城に堅く踏み留つて、よくもその節義を全うしたといふことは、後にも述べるやうに、私は近世學術史上の一美事であると思ふ。

一千九百二十六年五月四日ヘルバルトの第百五十回の生誕日に當つて、ラインは『余は如何にしてヘルバルトに來りさうして何故にヘルバルトに留まるか』といふ一篇を書いてゐる。その言ふところに依れば、彼を先づヘルバルトに導いたものは、ゲッティンゲンの大學において親しくヘルバルトの教を受けたストイ教授であつた。イェナの大學でストイに學んだラインは轉任のストイの後を追つて一千八百六十七年にはハイデルベルヒの大學に趣き、更にストイの指導を受けた。『斯くしてハイデルベルヒ時代は余に取つて、教育學を職業として選び且つ此の目的の爲に愈々益々ヘルバルトの著作において余を深める上に決定的であつた。』と自らも洩らしてゐる。今や教育學の研究に全生涯を献げることに意を決したラインは、次いで萊府の大學に入つて、有名なチラーに師事することになつた。ストイの下でヘルバルトの哲學と教育學とに弟子入りしたラインは、新たにチラーの下で其後の生涯を支配したヘルバルトの教育學とそれの哲學的基礎との探究に深入りした。斯くして培つた蘊蓄は先づ表はれてアイゼナハの師範學校長時代にはビルケル及びシェラーと共に編纂せる『國民教授の理論及び實際』八卷となつた。其後彼が世に問うた數ある著作のうちで我等は『組織的叙述における教育學』『ヘルバルトの管理・教授及び訓練』『教育學綱要』『倫理學の基礎』『藝術・政治・教育學』『我國學校組織の新構成』『無宗教學校』『マルクスかヘルバルトか』の八種を擧げなくてはならない。而かも教育學徒としての彼れが業蹟を史上に永く留めるものとして、私は三卷からなる『組織的叙述における教育學』を擧げるであらう。我等はこの著作において、更生のヘルバルト派教育學の雄姿を仰ぐことが出來る。蓋し『余はヘルバルトの教育學が一つの本質的の修補を必要とする確信を懷いてゐた、彼が純學者氣質は時代の潮流におけるあらゆる侵害を忌み嫌つた』と自ら洩らすラインは、新なる時代の潮流をなみ〳〵と酌み來つてヘルバルト教育學の成長を企てた。この意味において『組織的叙述における教育學』三卷が眞に時代の要求に適つたヘルバルト派教育學の法典として迎へられたのも怪しむに足りない。我々は開山としてのヘルバルトの大を稱へると共に、使徒ラインが此の一派の組織と發展と更生とに捧げた勞を多としなくてはならない。ラインが學問上に立てた偉勳の一つとして、我等は更らに十卷から成る『教育學百科辭典』のあることを忘れてはならない。ラインの編纂に係る『教育學百科辭典』は獨逸の學術が世界に誇り得る所以の一大勞作に數へられてゐる。我等は世界における教育學の辭典として、佛蘭西においてはブイッソンの、英吉利においてはワットソ

ンの、亞米利加においてはモンローの、獨逸においてはラインのものを、夫れ夫れ代表として數へるとが出來る。此の四大代表の間にあつて、學界の第一線に立つ學者を網羅して事に當つたラインの辭典は、世界教育學界の神器と呼ばれ、獨逸にあつてはこの辭典一度世に出て、群小皆な影を潜めたとさへ言はれてゐる。ラインの効績もまた大と言ふべきである。

三

ヘルバルト派教育學の建設と發展とに献げた効果多き彼れの努力は、併し、彼が畢生の事業の一部に過ぎない。蓋し單なる腐儒たるには餘りに實踐的の才能とさうして民族文化の更生に對する道義的關心とを備へてゐたラインは、獨逸教育の從てまた世界教育の實際に對して劃期的の影響を與へた。教育學の理論的基礎そのものに對する種々なる不備は暫らく措き、教育に與へた實際的影響の廣く且つ深かりし一事に至つては、人類教育の全歴史を通じて、恐らくはヘルバルト派教育學に及ぶものはないであらう。さうしてヘルバルト派教育學の實際的影響をして斯く廣く且つ深からしめた所以の一大努力を、我等はライン教授において見るのである。彼は烱々たる眼光を以て、眞に價値あるものを時代の雰圍氣中に認識し、且つ身を挺して自らそれの實現に當るの誠意と勇氣とを有つてゐた。一獨逸の各大學において既に久しくその獨立を認められてゐた多くの教科と同樣に、教育學も亦獨立の一教科としての位置を大學教育の組織内に占むべきであり、且つそのことが國民教育の發達に缺くことを得ない一つの緊急な要求であるといふことを堅く信じて、その實現を見るに至らしめたといふこと、二獨逸人文の發達の爲に、新たに大學の門戸を婦人に解放したといふこと、三自己の座席するイェナの大學内に先づ教育練習學校を創設して、教育の實際的探究の機會を總ての學生に與へ得るに至らしめたといふこと、四獨逸教育者の學術的更新の爲に、あの有名な休暇大學を一千八百八十九年イェナの町に創設したといふこと、五『哲學及び教育學』並びに『教育學雜誌』の編纂者として教育の理論と實際とに關する啓蒙事業に努力したといふこと、六諸外國の教育の調査研究のことに當つたといふこと、七時代の要求に應じて獨逸統一學校の實現に最善を盡したといふこと、八獨逸教育者の社會的位置を向上させる爲に、先づその統一を企圖したといふこと。數へ來ればラインが新時代の教育に對する功績は枚擧に遑もない。

四

ヘルバルト學派の殿將ライン教授の長逝に當つて、私は此の學派に就いて平素感ずるところを一二書きつけて見たい。教育の事實は言ふまでもないが、それの理論と雖ども、少くとも廣義にお

いては人類の歴史と共に始まつたのであるが、その理論を言葉の正しき意味における學問組織へと高めたものは、人の知る如くヘルバルトであつた。彼れの教育學は一個の學問組織を具へてゐただけではなくて、凡そ教育學の本領と言つてもいゝ、教育の實際を指導し若くは支配することにおいて、十分その特色を發揮した。我等はヘルバルト以後の教育學の歴史を一瞥することに依つて容易にこれを看取する。實際ヘルバルト歿後の教育學は今なほ漂白の旅に彷徨ふものと言つていゝ。その間にあつて獨り新カント學徒のナトルプは教育學の基礎を確立することにおいて、一覇業を營んだとは言ふものゝ、ヘルバルトにおけるラインの如き後繼者を今尚ほ得ない爲に、その基礎的教育學の精練純化と、さうして前にも言つた教育學の本領でなくてはならない教育實際の指導と支配とに對する工夫を著しく缺いてゐる。而かもナトルプ以後の現代を見れば、教育學の基礎そのものは或は精神科學的心理學に依て、或は現象學的方法に依て、或はまた新生の辨證法に依て、度重なる輪回轉生の過程に置かれ、未だ安住すべき一點もない。教育學の基礎さへ安住のところがない。況んやそれを教育教授の實際に移す工夫に至つては、人は茫然自失して、その爲すところを知るに苦む外はない。斯く考へてヘルバルト教育學が近世教育史上に演じた役割の如何に大なりしかを見遁がすものはないであらう。勿論我等はヘルバルト教育學が藏する大小様々の缺點をそのまゝ恕さうとするものではない。既にナトルプやシュプランガーやリットなども指摘してゐるやうに、教育における當爲の世界を狹義の倫理學が獨裁するは難いであらうし、また教育の目的は客觀の學としての倫理學が、その方法は主觀の學としての心理學が規定し得るとして、その客觀の學と主觀の學とが教育學に於て互に融合し得る所以の內的關聯性を明かにせざるが如きは、確かにヘルバルト教育學が自省を要する項目である。從て教育目的設定の基礎的地盤が先づナトルプにおいて倫理學より全哲學へと解放され、更にシュプランガーやリットに依てその全哲學が全文化へと解放されるに至つたことは現代に於ける教育學的基礎付けの一進展であり、またヘルバルトに於る教育學の基礎としての心理學が所謂精神科學派に依て、詳しく言へばシュプランガーの心理學に依て著しく徹底し、その必然の歸結が教育學的思惟における目的と方法との機械的圖式的分離を救濟する上に多大の効果ありしことも拒み難い。けれど待て。倫理學が教育目的の設定において少くとも優越の位置を占めるといふは永久に眞理であるし、またヘルバルトの心理學といへども表象力學の名の下に一蹴されることほど左様に主知的な若しくは機械的なものではないであらう。またヘルバルトの教育學は品性陶冶を强調するの故を以て屢々個人的な教育學としての極印を押されてゐるが、我等の見るところでは寧ろ餘りに多くの、若しくは少くとも

十分の社會的文化的契機を藏してゐるやうである。邪惡はすべて物の部分的認識に發するとか。我等若しヘルバルト教育學をその全體の姿において觀、且つその表現法の形式に拘泥せず、よくその背後に潜む内面的の意味を讀むだけの誠意と雅量とあらば、惜しげも無げに曾ては捨てられた此の派の教育學において、我等は多くの教育學的理念の聖光を仰ぎ見ることが出來るであらう。

ヘルバルトの第百五十回の生誕に當つて公けにした『如何にして余はヘルバルトに來り、さうして何故に余はヘルバルトに留りしか』といふ一篇の中に、ライン教授は述べてゐる。『余はヘルバルトに來つて、さうして彼に留つてゐる。何故なれば彼にありては品性陶冶の要求が獨逸人の念頭を去つてはならない最高のものとして、如何なる他の獨逸の思想家にも見ざる明瞭と確實とにおいて代表されてゐるから。余は彼に留つてゐる。何故なれば獨逸人を意志の人間にするべく、彼れの理論を實際に移すことが必要であるから。』教育學が如何に深遠な世界觀に立脚の根據を求めても、『品性陶冶の要求』は教育學における永久の眞理である。また凡そ教育活動が存在における當爲の具體的發展に依て、人類文化の斷えざる更新を企圖する實際的の仕事であるとするならば、理論を實際に移す工夫は教育學の本領である。我等はライン教授が、要するに『品性陶冶の要求』とか若しくは『理論を實際に移すこと』とか言ふやうな、寧ろ餘りに平凡な立場に踏み留つて、而かも踵を繼いで興るあらゆる學派の迫害にも拘はらず、長い八十二年の生涯を全うした、あの殉教者的な信仰と膽力と清節とを永く人類教育史上に傳へたい。(一千九百二十八年二月二十三日萊府レッシング町の假寓にて)

フォルケルト教授の思出

一

「老フォルケルトが逝つた。五月八日午前七時、享年八十二。突如として夢のやうに逝つた。小西先生と貴下との名で花環一個を靈前に供へた。葬儀は明後十二日の午前十一時半、例の南墓地だ。チリンダーを冠つて僕も會葬する。何れ詳しく。」

さも急の知せらしい書き振りで、はる〳〵教授の訃音をライプチヒから知らしてくれた岩井勝二郎君はその後間もなく、「二十三日にはドリーシュの教室でフォルケルト老先生の追悼會がある。招かれたから行かうと思ふ。さうして又書く。」と言つてよこした。岩井君の便りと前後して、私の世話になつたライプチヒの宿の女將は「久々の御無沙汰の埋め合はせに、今日は重苦しいほどのお便りをする」と書いて、「ライプチヒ最新報知新聞」と「新ライプチヒ日報」とに載つてゐる老教授哀悼の記事の切抜に、御丁寧にもライプチヒ大學哲學科の名で發表してある教授の死亡廣告まで鋏み切つて送つてよこした。「ライプチヒ最新報知新聞」の記事は約半頁にも及ぶ詳しいもので、

私も彼地で相識つたシグニツ講師の筆である。「新ライプチヒ日報」の哀悼の言葉は長くはないが、併し、其處に挿んである一葉の寫眞は亡き教授の面影を偲ぶにいゝよすがである。

私は此等のすべてを机の上に並べ、其の前に座つて、「とう〳〵フォルケルト老教授は逝つたのか——成る程フォルケルト老教授は逝つた」と、しみじみさう思つた。

二

私がフォルケルト教授の名を初めて聞いたのは京都時代のことだ。深田先生の美學の講義の中にちよい〳〵出て來る名前を聞いて、さういふ美學者が獨逸にあるのかと思つた。そのフォルケルト教授に親しく私の會つたのは一千九百二十一年の一月初めのことである。戰後教育の視察が目的で西洋へ行つた私は、ライプチヒ滯在中小西先生のお伴をして度々教授を私宅に訪れ、「新劇場」で一所に歌劇を見たことなどもある。當時のことは今は記憶も朧ろであるが、それでもなほ色々と思ひ出される。歌劇が濟んで一所に外へ出て、アウグスツスの廣場で別れる時のことであつた。教授は小西先生の手を握つて數分かと思ふほど長く離さずに言つた。「戰後の私達の生活は慘めなものだ。大學の教授でありながら、さうして美學といふものを專門にしながら、久しいことこの劇場へ來ることも出來ずに居た、今日は實際嬉しい。有難い。」この言葉を私は今も忘れ

ずに居る。「いゝ叔父さん」とさう言ひたいやうな人、西洋にもこんな優しいいゝ叔父さんがゐるのかしら、私の郷里の信州の田舍なぞへ行くと、時に見付けるやうな、さういふやうないゝ叔父さん。フォルケルト教授が私に與へた第一印象はこれだ。小西先生が斯ういふ學者の下に三ヶ年の在外生活を送つたのも成る程と私は合點した。

初めて私宅を訪ねた時には七十七の祝に弟子達が贈つたといふ胸像なぞを見せながら、教授は夫婦してさも嬉しさうに四方山の話をしてくれた。一度會つただけで早や長年の舊知の思ひのする教授を私は其後も一二度訪ねて、學界の樣子なぞを聞いたものだ。「ナトルプのペスタロッチー觀は今日最も優れたものゝ一つであるが、露骨な論理主義をペスタロッチーに當てがふは果して如何」「苟くも獨逸の大學で哲學の講義をしようほどの者は早かれ遲かれ、一度や二度はゲーテに就て講義をするのが寧ろ常である。」こんな言葉を聞かされたのも確か其時のことだ。西田宏氏が教授の「藝術と國民教育」を日本語に譯したことを教授が喜んで話したのも亦其時のことだ。

三

一千九百二十八年から九年にかけて、私は外遊一年有半をライプチヒに暮した。專門の方はリツト教授に就いてと心に決めてゐたものゝ、八年前の僅か一面識の間にはまだ親みといふものがない。さうして此の事が言はゞ本能的に私をフォルケルト教授に近づけた。私がライプチヒに着いた一千九百二十八年の七月には恰も教授の八十回生誕の祝賀の催があつて、此の碩學を敬慕する多くの學徒が獨逸の各地から集まつた。教授とは個人的にも因緣淺からざるシュプランガーなぞも伯林からやつて來た。八十歳の老齡にも拘はらず、尙大學で講義を續けてゐるには私も驚いた。「ソクラテスとプラトン」、「ニイチエ、その叙述と批評」「認識論序說」。私の在留中このやうな題目を次ぎ次ぎに掲げて、教授は毎學期大學の講壇に立つた。

私が親しく教授の聲咳に接したのは、併し、大學の講堂ではなくて、何時もその私宅であつた。着獨後初めて私が訪れると「待つて居た。京都の小西教授からも手紙が來てゐるので、もうやつて來るか、もうやつて來るかと待つてゐた。」といふ情ある教授の言葉には私も心から恐縮した。夫人に逝かれた後の教授はまださう老いてもゐない、品格あるハウス、ダーメの屆いた世話で、別に不自由もなく暮してゐるかに見えた。會ふときも別れるときも、長いこと握手の手を離さずに話すが教授の持ち前である。初めて訪ねた時なぞは二三分もの間私の手を握つたまゝで「この頃は日本の人達とも兎角交際が少くなつて……」などとさも親しげに言つた。だんゞ老いて、首から背中にかけて、蟬のやうな形になつた、「いゝ叔父さん」の老教授の姿は、今も私の眼の前

にちら〳〵する。毎日どんな生活をされてゐるか、といふ私の問に答へて、朝は何時も七時に起き、十一時まで書齋で仕事をし、それから三十分訪問を受け、十一時半になると、近くのローゼン、タールに散歩に出るといふ。「散歩のお伴をしませうか」と私が言へば「いやハウス、ダーメに手を引かれた老人のお伴は御迷惑千萬で持て餘すぞ」と笑ふ。机の上の原稿を見ながら、「毎日のお仕事と言へば、何かお書きにでもなるのですか」と私が問へば、「實はこんなものを書かうと思つて」と、取り出して來る。見れば「感情の本質の研究」とある。會話が現象學の方へ流れて行つたので、私は「その御研究の方法は現象學的分析ででもありますか」と試みに問つたら、「いや、わしの方法はわし獨特の記述的の方法で……」との答。私はその一握りの原稿を見て、これが教授の絶筆にでもなりはせぬかと豫感して、言ふべからざる淋しさを感じた。其後しばらくして岩井君を紹介がてら引つ張つて行つて、いつぞやの御研究はもう脱稿しましたかと尋ねると、教授は又机の上から原稿を持つて來て、私たちに見せた。見れば表題が變つてゐる。初め「感情の本質Das Wesen der Gefühle」とあつたのが、小刀か何かで削られて、「感情と意志とに就いての研究 Versuch über Fühlen und Wollen」と改めてあるのに、私は一種の興味を感じた。さうして去年出版になつた此の書が事實教授の絶筆になつたのである。

四

獨逸から傳はつた教授の訃音を取り敢へず小西先生に傳へると、先生は私に何か書けと言つて、フォルケルト教授自筆の自叙傳まで添へて來た。自叙傳といふのは僅か一二頁の短いものではあるが、小西先生が初めて獨逸に行かれた今から二十六七年の昔、教授の「現代哲學序說」を邦語に譯して出版しようとされた時——先生のこの計畫は實現されずじまひであつたが——教授が自ら書かれたといふいわれあるものだ。このやうな貴重な材料あるにも拘はらず、私は他に自らその人あるを思つて、追悼の筆を取るのを一應は辭したが、更らに勸められるまゝに、こゝに少しくその生涯を叙して、逝ける教授を偲ぶよすがにしたいと思ふ。

フォルケルト教授は一千八百四十八年七月二十一日ガリチアのビアラといふ町に近いリプニック村に生れた。テッシェンの新教文化中學を卒へてウィーン大學に學び、轉じて二十歳の時イェナ大學に入つた。イェナではクーノー、フィッシャーの强い人格的感化の下にあつて、先づカントに赴き、カントから更らに彼が生涯に決定的の影響を與へたヘーゲルに赴いた。その結果はフォルケルト自らが指示して「絶對精神の一元論」といふ思惟法となり、彼が思想のあらゆる轉回にあつて、尙且つ彼には決定的な世界觀として一貫してゐた。凡てをヘーゲル的に理解もすれば批評もしよ

うとするこの態度は彼がライプチヒ大學に提出した一千八百七十一年の學位論文「スピノザ體系における汎神論と個人主義」の中にも十分跡付けることが出來るであらう。同樣に一千八百七十三年の著作「無意識的なるものと厭世觀」においても、彼は自らも言つてゐるやうに、エデュアルトフォン、ハルトマンの形而上學をヘーゲル的に分析しようとした。併しヘーゲル哲學もその最初の豫約をそのまゝ彼において履行することは出來なかつた。何故なれば第十九世紀の實在論がそれの權利を行使するや、彼は決して時代の過度の實在論に溺れることなく、よくヘーゲルが過度の理想主義から自己を轉じたから。

一千八百七十六年彼は「最新美學における象徴概念」を以てイェナ大學の哲學講師に就職し、一千八百七十九年助教授に進んだ。その間彼はカントの批判的立場に立つ世界認識の問題へと自己を引き戻し、一千八百七十九年には「カント認識論の根本原理の分析」を公にした。けれども當時理論的嚴密においては十分滿足を見出し得なかつた内的なものの心情的なものが彼れの胸を打ち、彼は詩と藝術との廣野への轉回に依つて、一つの新らしい、さうして行手遙けき前途を想望した。自ら洩らして當時余に言はゞ「美的世界觀」が展けて來たと言ふのがそれである。さうしてこの世界觀が包括的な綜合と基礎付けとを求めて進むところ、今やたゞにヘーゲルの樂天的汎論理主義

においてだけではなく、ショーペンハウエルの厭世的非論理主義において、彼はその世界觀の最後の形而上學的信賴と關聯とを見出した。斯くして彼が美的世界觀は「悲劇の形而上學」においてそれの最高潮に達したのである。

思想の上の斯かる發展と共に外部的社會的の境遇にも種々なる變轉があつた。即ち彼は一千八百八十三年には哲學の正教授としてバーゼルに招かれ、一千八百八十九年にはヴュルツブルグに轉じ、一千八百九十四年にはヴントの勸めで哲學及び教育學の正教授としてライプチヒに移つた。一千九百十年ウィルヘルム、ハインツの死後哲學專任の教授になるまで、彼が教育學及び教育史を講じ、教育哲學のゼミナールを指導してゐたことは、或人も言つたやうに、彼が哲學上の業績に多少の妨げになつたかも知れない。けれども哲學者としての彼れの生涯は勿論このライプチヒにおいて大成したので、内的に外的に變轉多かりしそれ以前の生涯はあげてライプチヒ時代への準備であつた。

五

ヘーゲルの理想主義から轉じて認識論的問題への進出は、既に一千八百七十九年のカント研究に發端し、一千八百八十五年の「經驗と思惟」において著しく成熟したかに見える。この方面の努

力は其の後或は「人間的正確の源一千九百六年」となつたり、或は認識論上の主著「正確と眞理一千九百十八年」となつたり、或は「感情的正確一千九百二十二年」となつたり、或はまた「時間の現象學と形而上學一千九百二十五年」となつたりした。斯くして論理的思惟の認識能力に對する信頼は彼が後期の作中に特に顯著な進境を見せてゐる。

彼が學究生活は晩年に至つて少しも衰へず、齢八十を超えて尙且つ講壇に著作に精進を續け、一千九百二十八年には「個性の問題」を表はして、自我の本源と彼岸の世界とに關する根本的の探究を試み、一千九百二十九年には「感情と意志とに就いての研究」を公にして、意識の忠實な記述と分析とを試みてゐる。彼は死の瞬間に至るまで自己の哲學の簡潔な全體的叙述の完成にいそしんでゐたかに見える。

既に述べたところに依つて、フォルケルト教授における哲學史的關心は就中ヘーゲル・スピノザ・ハルトマン・カント及びショーペンハウエルにあつたと言つていゝ。我々はショーペンハウエル學者としてのフォルケルト教授にも謝さなくてはなるまい。何故なれば一千九百年の彼が「ショーペンハウエル、彼れの人格と教説と信仰と」は恐らくショーペンハウエル研究の標準價値の著作であるから。廣義の獨逸理想主義に愛着してゐたフォルケルト教授はシルラーやゲーテにも關心し、ライプチヒでは「ゲーテのファウスト」を講義した。ヘーゲルやショーペンハウエルに次で、個人的に相識るニーチェが教授の思想に本質的の影響を與へたことも有名である。「如何なる哲學者もニーチェのやうに魅惑的に且つ又鼓舞的に私に働きかけた者はない。私は正に別して彼が初期の著作に私の思惟と發展との多くの解放を謝さなくてはならない。彼れの哲學に從事することは私には全く人格的體驗の事柄になつた。けれども私は彼が哲學の或る方面をばその最内部において打克つべきものと感じた。斯くて私はニーチェを内面的に加工した。要するに私は消極的に若しくは積極的に彼を通じて私の生活を生活し拔いたと言ふことが出來る。」教授自らの此の言葉から人は容易くニーチェの教授に對する關係を讀むことが出來るであらう。

併しフォルケルトの名は恐らく一般の哲學者としてよりは寧ろ現代美學の一人の組織家として後世に殘らなくてはならない。事實彼が科學的並びに哲學的業績の中心點は美學の領域にある。その由つて來るところが、就中あの深遠にして敏感な美的體驗の才能にあるは言ふまでもない。既に述べたる「美的世界觀」の如きも實にこの同じ才能に源を發してゐる。惟ふに廣義の理想主義的關心は彼を單なるヘーゲル哲學の應用に留めず、藝術的實在の創造の王國へと彼を導いたのである。そこに人は「美學體系一千九百五年」三卷と、それの補遺とも見るべき「美意識一千九百二

十一年」とを見出すであらう。

六

さて學徒としてのフォルケルト教授が生涯の、粗雑な拙ない、私の短かい素描は以上の如くである。この素描において、要するに彼は廣義の獨逸理想主義に安住してゐたと言へばそれまでのやうでもあるが、併し、それにしても人はヘーゲルとショーペンハウエル、若しくはカントとニーチェとの對立を、彼れの思想世界において見遁がすことは出來ないであらう。ヘーゲルの論理主義とショーペンハウエルの非論理主義、カントの認識論的形式主義とニーチェの文化哲學的實質主義。對立せざるを得ない此等兩契機の相交錯するところ、其處に教授の思想世界が具象的に開けて來たと見るは僻目だらうか。大凡フォルケルトといふ人は個人的に接した者の誰もが容易に感知し得るやうに、型の大きい、言はゞ包容的な一大存在である。ヘーゲルにも行けばショーペンハウエルにも行き、カントにも行けばニーチェにも行くところに、學徒としてのフォルケルト教授の趣があつたではなからうか。「生命の刺激は神祕と明瞭との混合のうちにある」とは教授の言葉である。彼はその思惟の精密にして苟くもせざる思想家であつて、而も決して何等の合理論者ではなかつた。彼は科學的な論理的な思想家として正當な要求を要求しながら、而もその故

を以て必ずしも又決して實在の前論理的な若しくは超論理的な力と意義とを沒了しようとする態度には出なかつたのである。このやうな一般的な且又基礎的な態度を人は彼が生涯の全體觀において明かに理解することが出來る。勿論燕雀は鴻鵠の志を知るに由もない。教授の如き凡そ人類の生產し得るあらゆる思想的契機を呑吐するの概さへ示す多方面的にして流動的の內面性は、外部から窺知することを最も難しとするものゝ實例である。さうして彼がこの內面性は常にそれの最後の形而上學的世界觀的立脚點を宗教的領域に求めてゐたかに見える。この意味において、私は今や亡き教授の思出に相應はしきものゝ一つとして「悲劇の美學」の中に說く教授の次ぎの言葉を引いて筆を擱きたい。「それにも拘はらず、人は、私は信ずる、次の思想を敢てせざるを得ない。人類のこの地上の發展は一個の超時間的な生活關聯に織り込まれる。この生活關聯においてこそ人類の地上の流轉の收穫はより廣き進展の中に這入つて行く。斯くて事柄はかうだ。人類の歷史における積極的なまた救濟的な意味は、偏にそのより高い他の樣式としての神の世界の生活秩序を通じて將來する。その神の世界の生活とは、言はゞ我々の空間及び時間の世界を截斷し、さうして人類の歷史としてのこの截斷の上に自己を表現しようとするその神の世界の生活なのだ。」

（昭和五年六月十一日）

——終——

昭和六年三月三日印刷
昭和六年三月八日發行

（定價金壹圓八拾錢）

著作者　長田新
發行者　目黑甚七　東京市京橋區京橋二丁目三番地
印刷者　高橋郁　東京市京橋區銀座西二丁目三番地

印刷製本　三協印刷株式會社
藤齋

獨逸だより
再遊記

著作權所有

發行所　目黑書店
東京市京橋區京橋二丁目三番地
新潟縣長岡市表町四丁目（本店）
新潟市古町通七番町（支店）
電話京橋三四一七番（東京）
振替東京二八〇九番
電話長岡一八番（長岡）
振替東京三六一九番
電話新潟九〇三番（新潟）
振替長野四〇九〇番

長田新先生譯書　目黑書店發行

フレーベル原著　**兒童神性論**　定價金一圓六十錢　送料六錢

現代教育社會の無反省を開拓し現代思想の渦中にあり乍ら靜かにフレーベルの古典を求めて譯述したもので教育界不朽の聖典である。

ペスタロッチ原著　**道德及宗教教育の本質**　定價金一圓四十錢　送料六錢

ペスタロッチの原著を明快なる筆致を以て邦譯せるものにして「ゲルトルードは如何にして其の子を教ふるか」の十三信十四信の抄釋である。

259
624

終